2015年 CSA ワーキング・スタディ・ツアー
参加者感想文(寄稿)

2015ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

連合本部　連帯活動局　若　月　利　之

CSAや連合の構成組織が直接支援をした小学校、高校生寮、連携している関連省庁については、他のところで報告もあるので、ここでは今回の訪問で感じたことを率直に書いてみたいと思います。

ラオス訪問は、個人的には今回で4回目でした。前回は2009年だったので今回が5年ぶり、その前が2002年、2003年と、なぜかほぼ5年毎に縁のあるラオスですが、前回2009年に訪問したときの発展ぶりに驚いたことを思い出し、またどのようにラオスが変化しているのかを、実際自分の目で見ることも楽しみにして今回のツアーに臨みました。

確かに、5年ぶりのビエンチャンは車の数も信号機の数も圧倒的に増え、ASEANの加盟国として発展を遂げているように見えました。初めて訪れた2002年の時は、ラオス国内には信号機が1カ所しかなかったのですが、今ではまず交通渋滞でビエンチャンの一日が始まるそうです。

しかし、今回ナカン村とファサン村という、CSAが寄贈した小学校2カ所を訪問し、大使館でも話を聞きましたが、ラオスという国がおかれている環境を目の当たりにして、衝撃を覚えました。

ビエンチャンから車で約3時間のところにある両方の村ですが、ビエンチャン中心街を抜けてしばらくすると、道路の殆どが未舗装で、移動にはかなりの困難を要しました。途中川を渡る橋ですら、車がやっと１台通れる、しかも橋梁もあまりに細く、いつ折れるか分からないような頼りないもので、ハラハラしながら目的地を目指したことが今でも克明に思い出されます。

広大なラオスの国土には600万程度の人口しかおらず税収が少ない一方、それらの人たちが点在しているため、インフラや公共機関が隅々まで行き届かないとのことでした。CSAが学校建設支援をしていることの重要性を実感しましたが、国の発展においてはまずインフラの整備が必要であるから、ASEANの加盟国として飛躍を期待されていることもあり、急速な発展には相当な課題があると改めて感じました。

また、CSAを通じて現地に送られている衣服が、大変限られたマンパワーの中で着実に地方に送られていることを知り、この国の人たちの気質のまじめさを感じました。CSAの支援は、ラオスという国を考えれば小さなものかもしれませんが、着実に生かされており、また受け入れているまじめなラオスの人たちによって実現しているということを、現地を訪れて強く実感した中で、もっと彼らにとって効率的な支援方法はないのか、と考えさせられることが多々ありました。

訪問した小学校、そしてサンティパープ高校の寮では、建物の老朽化で、修繕が必要なところが散見されました。特にナカン村の小学校のトイレは、便器が割れていたり、水道（井戸）が整備されていないことから水洗が適切にされているのか不安であったり、天井が抜けているなどして、不衛生さは否めませんでした。サンティパープ高校の寮もトイレが半分使えない状態で、男子トイレは使えないために施錠されていました。早急な対応が求められています。

CSAは「連合愛のカンパ」の助成を受けて運営しています。連合運動に携わるものとして、今

回、愛のカンパがとてもいいことに使われていることを知り、こういった活動への支援については、もっと目に見える形にし、そして助成がもっと広がることを願う気持ちを新たにした今回のスタディーツアーでした。願わくは、また他の学校を訪問して、再び高校の卒業生や、関係者の人たちとの交流を図りたいと強く思いました。とても充実した1週間でした。

最後に、今回のツアーに際して、準備や現地対応において、副会長の渡邉さんには大変お世話になりました。また、訪問先の関係者の方々にも、大変好意的に接して頂きました。そして8日間を共に過ごした団員の仲間の皆さんにも、一緒に楽しく過ごさせて頂きました。本当にありがとうございました。早くオフ会が開かれることを望みます。

2015ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

ＵＡゼンセン・アシックス労働組合　可　野　淳　二

５年間アシックス関西支社で中古衣料カンパの収集活動を担当して、「どこでどんな人に配布支援しているのか」知りたかった。１０月に社内応募で選出され、念願適ってこのツアーに参加できることになりました。１月の出発まで、ラオスは未知の国の為、まずラオスについて学習を始めました。

他国と争いの犠牲になったり、内戦が繰り返されたり、不幸な歴史的背景を背負った国で、私には東南アジアで可哀想なイメージの国でした。

■　救援衣料について

ラオス・タイ２箇所の衣類保管倉庫を視察して感じたこと

昨年１１月にトータル約９０００パッキンが入荷、物量の多さに驚きました。

倉庫にはまだ多数残っていましたが、各地への煩雑なデリバリー作業、そしてバンコクでは座り込んでの衣料選別作業には、ご苦労様の一言でした。暑い国なのでＴシャツや夏物が必要かと思い込みがありましたが、間違いでした。昨年は北部では寒さが厳しく厚手の衣類の要望があったことを聞き認識が変わりました。アイテムとしてジャージ・スポーツウエアのニーズも多いので今年は多数収集したいと思います。バンコクの倉庫では黒田さんに当社のパッキンを発見して頂き　感動しました！　感謝です！

また各地で子供達に衣類を配布している写真を見て、支援が役立っていることに実感しました。今後、救援衣料活動のモチベーションも上がると思います。

■　ノンカイでの衣類引き渡し式

私達の訪問日に合わせて盛大なセレモニーの日を決めていることに驚き、子供、老人、障害者の方から感謝されていることを嬉しく思いました。手渡したおばぁちゃんの笑顔が今でも忘れられません。長年のＣＳＡの活動の重みを実感しました。

■　サンティパーブ高校ＣＳＡ寮訪問

高校生寮で行われたバーシー儀式

ＣＳＡ寮はラオスの古都、ルアンプラバン（世界遺産）の町にありました。

西洋と東洋が融合したエキゾチックなこの町を私は大好きになりました。

寮に到着後、多数の生徒の出迎えと、ホール内での歓迎のラオス舞踊、心地良いリズムで一緒に踊ったことは、今でも脳裏に残っています。神聖なバーシー儀式にも感動しました。

（手首に巻かれた白い糸は最低３日間結んだままにしておくらしいです）歓迎されるばかりで、我々も何かパフォーマンスができれば良かったと思いました。寮生は親元を離れて一生懸命勉学に励んでおり、このような教育環境を支援しているＣＳＡの活動は素晴らしいと感じました。

■　各省庁・日本大使館・ＡＡＲjapan視察

＊ＡＡＲ難民を助ける会　今もベトナム戦争で投下された、クラスター爆弾の不発弾が数千万個埋まっており、ラオスの発展とインフラを遅らす原因にもなっていました。こんな所でこんな障害者支援活動も行っていることを始めて知りました。

＊ラオス日本大使館　大西惨事官からラオスの実情の説明には考え深いものがありました。日本は最大のラオスの援助国で、政府のＯＤＡで空港・道路建設その他様々な事業で貢献していることが理解できました。

ラオス人は、「家族、親戚を大事にして、お金の為に働かない、精神的にも余裕がある幸福な生活を羨ましく思うと」言っておられたこと、改めて幸せの価値感が日本人とは違うと感じました。帰国して幸福の意味を考え直したいと思います。そして苦しい時や辛い時は「ボーペンニャン！」の言葉を思いだすことにします。

最後に結団式で送り出して下さった、ＣＳＡの吉井会長、今回お世話になった渡邉副会長そして参加メンバーとラオスのフンペンさん、タイのチャイさん、現地のスタッフの方々本当にありがとうございました。

2015ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

ＵＡゼンセン　流通部門　カスミユニオン　中央執行副書記長　黒　田　誠

今回、初めて「ＣＳＡワーキング･スタディ･ツアー」に参加した。カスミユニオンでも毎年、「中古衣類カンパ」を実施しているが、そのカンパした衣類が実際どのような形で、また、現地の方々に貢献出来ているのかが具体的に確認できたことが一番の印象として残った。同時にどのような救援物資、インフラの整備が必要なのかも合わせて確認できた。

「中古衣類カンパ」はカスミユニオンの社会貢献活動の中でも、特に大きな実績を残すことのできる活動の一つで、組合員一人一人が直接参加できること。組合員一人一人が社会貢献をしたと実感できる活動であるため、今回の報告で再度、周知徹底し、どれだけ現地の方々に貢献できているのかを報告していきたい。さらに、次年度への活動、継続できる社会貢献活動へ繋げていきたい。

実施年	衣類枚数
2008年	10,548枚
2009年	7,686枚
2010年	7,530枚
2011年	6,409枚
2012年	6,419枚
2013年	11,324枚
2014年	8,151枚

今回初めてラオスを訪れたが、そもそも、「ラオス」という国名は、普段の生活の中であまり触れることがなかったので、衛生面や食事、治安等不安なことが多かった。しかし、実際に行くと想像していた国とは大きなギャップがあった。

ラオスの首都ビエンチャンに入ると車、バイクの多さに驚いた。そして人々が家の前で調理したり、子ども達が妹弟の面倒をみたり、親の商売（仕事）を手伝っている光景が目に入った。とても救援物資の必要な国とは思えなかった。

しかし、実際に訪れた小学校まで車で何時間もかけて走ったが、「舗装されていない道路」、「大きな穴のある道路」「崩れている橋」等の光景があった。また、集落では唯一、電気のインフラ整備がされている程度であったが国全体としては80%の普及だという。

訪れた小学生では、靴を履いている生徒と素足の生徒が走り回ったり、サッカーをしていて首都ビエンチャンの人々とは服装や持ち物に若干違いを感じた。やはり、衣類を始めとする救援物資が必要であると。

今回は小学校2校と高校1校を視察し、生徒達と交流することができたが、広い国土には多くの村や町が存在しているが、全ての児童が教育を受ける環境が整備されていないようだ。

そうした中、学校の建設、救援物資の調達と子どもたちの為、また、農林業の労働を占める住民にとって、ＣＳＡの活動は非常に大きな存在だと感じた。

一方でラオスにとって大きな問題もある。ベトナム戦争時の不発弾問題である。人口に対して不発弾の数の割合が世界で一番とは大きな衝撃を受けた。今もなおこれだけ発展した世の中なのに犠牲者が報告されているので、このようなこともＣＳＡとして何かしらの支援が出来ないかと課題に感じた。

高校生と卒寮生との交流ではラオスの将来や夢について教えてもらった。そこで聞いたことは、日本の支援で勉強する環境が整い、将来は感謝の気持ちを表す為に日本への恩返しとして将来、日本で働きたい、留学したいという学生がいた。また、自分たちが勉強できた環境を国内に広めたいと語る教員を目指している学生もいた。そのような声があるということは、それだけＣＳＡの活動が役立たれているのだと実感した。また、この活動に少しで携わることが出来て誇らしくなった。

今回、実際に自分の目で見て体験したこと、この活動がどれだけの人に役立たれているか、貢献できているのかを一枚一枚心をこめて協力してくれたカスミユニオンの組合員、さらにＵＡゼンセンの組合員、そして連合に加盟している労働組の組合員一人一人に伝えていき、さらなる活動、継続できるようにしなければならないとこが使命と感じた。
一枚でも多く、一円でも多くのカンパ活動ができるように活動していきたい。そしてそれが少しでも多くの方に救援物資が渡り貢献できるようにも活動を継続していきたい。

2015ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

ＵＡゼンセン　ＳＭＢＣコンシューマーファイナンス労働組合　戸　梶　貴　明

今回の2015ＣＳＡワーキング・スタディー・ツアーに参加し、貴重な経験をさせて頂いたことを、ＣＳＡ事務局の皆様、ツアーに参加した仲間、そして、送り出してくれたＵＡゼンセンの部門の皆様に御礼申し上げます。

今回のツアーで特に印象に残ったことは、『宝物』と『ありがとう』です。

ナカン村の小学校を訪問した時、「ＣＳＡから送られてくる衣類が私達にとって一番の宝物」という言葉が印象に残っています。『宝物』という言葉を聞いた時、心が揺れる感覚がしました。物があふれている日本で、普段の生活で使用しなくなった洋服が一番の宝物という発想が私にはありませんでした。

私が中古衣類を担当して3年になりますが、どのような環境で生活している人に届けられ、どのような気持ちで受け取り、どれほど日常生活に必要なものか、深く理解できていませんでした。ただ、何となく中古衣類を送る運動に参加していました。

そして、ノンカイで救援衣類の引渡し式に参加しました。村長さんも参加する、一大イベントです。まずは村長さんへ衣類を渡した後に、子どもからお年寄り、障がいを持った人など、式に参列している一人ひとりに衣類を手渡ししました。

その時に言われた『ありがとう』という言葉は36年間生きていた中で一番深く、そして一番重く感じました。両手を合わせ、今にも涙が溢れ出そうな目は、今でも心の中に鮮明に覚えています。

『宝物』と『ありがとう』。日常の生活の中で忘れている大切なことを、考えさせられました。逆に、宝物と感謝の気持ちを教えてもらい、「ありがとう」とお礼をしたいです。

詳しい日程等は、他の参加者の方が記載していると思いますので、私は個人的に印象が残った

「宝物」と「ありがとう」について記載しました。中古衣類を送る運動の輪を広げていきましょう！

2015ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン・ソラストユニオン　鈴　木　教　子

【ラオスのシンボルでもある仏塔と私】
（ラオス タート・ルアンにて）

ソラストユニオンでは、代々新しく赴任した専従者がこのツアーに参加するという習慣（？）があり、2014年に続き、2015年も当組合より参加させて頂きました。

私自身、初の東南アジア。

ラオス・タイの両国については文化や特色の知識もなく、「現地の方とも言葉なくして相互の理解を深めることは出来るのだろうか・・・」と暫くの間不安を募らせていました。

出発日はチーム顔合わせを済ませた後、羽田発の飛行機が出発し、バンコクでの乗継ぎを経てラオスの首都であるビエンチャンに到着。メコン川を横目に車が走ると、自分の視界いっぱいに長閑な安らぎを感じました。そこはまるで北海道の田舎町のような懐かしさ。

「つ、ついに来たんだ…！！」とそこで気持ちが一気に高揚したことを覚えています。

今回の海外視察の目的は、CSAが建設した小学校や高校生寮の視察や交流、救援衣類の配布状況の確認、ラオス・タイの両国が抱えている諸問題の把握等です。しかし、私がこのツアーで一番印象に残っていることは、人々の「笑顔」に触れたこと。特にナカン村やファサン村の小学校では、子供たちの屈託のない笑顔の歓迎を受けました。私からの「サバイディ（こんにちは）」に彼らも照れながらも嬉しそうに「サバイディ」とニコッと笑顔で答えてくれたことがとても嬉しく思いました。子供たちはシャイだけど、人懐っこく、色々な表情で私達に訴えてくれます。言葉はわからないけど、私達の後をちょこちょこ付いて来てくれて、目が合うとニコッと笑ってくれる。手を繋ぐと、不思議とそこから私の心に伝わる何かがあり、思いが溢れそうになりました。「笑顔は人を幸せにする。」と改めて思えた瞬間でした。

【子供たちの優しい笑顔】
（ファサン村小学校にて）

しかしそんな笑顔の裏にも問題は山積み。

ナカン村の小学校校舎の維持管理と環境整備、サンティパープ高校生寮のトイレの老朽化がかなり目立ちました。早急に修繕が必要な最重要課題だと思います。トイレ内の臭いもきつく、消臭剤のようなものを救援物資として送ることも検討して欲しいと思います。

救援衣類保管倉庫では、保管方法、仕分け作業を実際に目で見て確認し、現地スタッフの声に耳を傾けたことで、現地ニーズに即した衣類の提供と、日本から

の輸送方法の改善が必要だと理解しました。不要な衣類を箱に詰めて送るだけでは、現地での仕分けに時間がかかり、困っている方の所へすぐに衣類を届けることが出来ず、タイムロスになります。これからの中古衣類の募集活動については、そのあたりにも注意して取り組んでいきたいと思います。

そして、忘れてはならないのが、ラオスの不発弾問題。

ベトナム戦争でアメリカ軍が投下した不発弾が未だにラオスの一部地域の地中に埋まり、住民達は常に死と隣り合わせで不安な日々を過ごしていると説明を受けました。この不発弾地域は、ラオスの貧困地帯とも一致し、土地開発が進められないだけでなく、農地における不発弾除去を行うため、農作業が出来ず、不発弾と貧困の負のサイクルに陥っているそうです。そして、不発弾の全てを撤去するまでには100年かかると言われており、その存在がラオスの発展を阻害している要因の一つとなっていることは間違いないだろうと確信しました。この不発弾問題は、ラオスだけの問題ではなく、日本も含めた世界の共通課題であるということを再認識し、私自身も微力ではありますが、日本で慈善活動をしたいと思うきっかけとなったＡＡＲ（難民を助ける会）の訪問となりました。

ラオス人の豊かな精神力と穏やかな笑顔に癒された私のワーキング・スタディ・ツアー。この国の空気感と人のあたたかさに触れただけで十分価値のあるツアーでありましたが、何より、同じ参加者のチームの皆さんと気持ちを一つにし、仲間としてお互いを尊重し合い高めあえたことも自分にとっては忘れることの出来ない記憶になっています。

メコン川のほとりで夕陽を静かに眺め続けたこと。ラオスで見た星空が、手に届きそうなくらいきらきらと輝きを放っていたこと。

そんなささやかなことも、チームの皆さんと共有できたからこそ忘れられない良い思い出となりました。皆さん、8日間本当に有難うございました。

最後に、ＣＳＡ事務局並びにこのツアーで出会ったチームの皆さんと現地関係者の方々、学生たちとそのご家族がいつまでも幸せでありますことを、心よりお祈り申し上げます。

【私たちの救援物資がありました!】
（タイ救援衣類保管倉庫にて）

2015ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

三菱重工労組　川　端　茂　雄

ラオス・・・・・どこにある国だ？？何語を話すの？通貨は？親日なの？国連が2014年の最貧国を発表された際、リストアップされていたな～程度の知識でワーキング・スタディー・ツアーに参加した。

三菱重工労組としてCSAの救援衣類を送る運動は平成21年から行っており、ラオスとタイに衣類を送る。活動の主旨・目的については理解していた。もちろん私自身も毎年できる限りの協

力をしてきた。

今回、ワーキング・スタディー・ツアーに参加させていただけるチャンスをもらったので、未知なる国ラオスについて、少しでも勉強出来たらと思って羽田空港に向かった。

今回のツアーに参加して、感じたこと、心に残ったことを記すこととする。

まず、はじめに救援衣類を送る運動についてである。組合員の協力のもと集めた衣類が保管されている倉庫としてラオス・タイの2か所を訪問した。今年のラオスは平年と比べ寒い日が続いていることもあり、冬物を中心に既に各地へ送っていたこともあり、予想より段ボールの数は少なく感じた。また、タイの倉庫では、全ての段ボールを開梱し、仕分けし、必要なところへ配送されていた。各倉庫で作業されている方々からは、ジャージや作業服が欲しいとの要望もあったので、次回以降の取り組みにおいて単組内で働きかけたいと思った。

今回2か所の倉庫を訪問し、残念ながら三菱重工労組から送った衣類を見つけ出すことができなかった。UAゼンセンなどでは、産別のシールが貼られており、どこから送られてきたのか探しやすくなっていた。産別内・単組内で何か工夫ができないか働きかけたいと思った。

また、救援衣類の引き渡し式にも参加した。中古衣類、人の使い古し、そんなに喜ばれているのか？とツアー前は思っていたが、衣類を贈呈した子供、お年寄り、障がい者など皆さんの目の輝きを見た瞬間、活動の重要性と両国からの期待の大きさを肌で感じることができた。

個人個人の活動は使わない洋服を捨てるのではなく、組合に寄付する程度の小さい活動であるが、その小さな活動をラオス・タイでは大きな期待をしていることを肌で感じました。

昨今、救援衣類の輸送資金が不足している旨の報告を単組内で受けたが。「中古衣類の寄贈」という活動は、一般組合員にも少しずつ浸透してきている。しかし、「輸送するための資金」については、組合員の中にも抵抗感がある人も少なくないと思う。カンパ金を単組から集めるだけではなく、もう一歩何か工夫も必要だと感じました。

基幹労連寄贈のファサン村小学校で文具を贈呈

次に小学校および高校生寮の視察・交流についてである。今回、ラオスにおいて2か所の小学校を訪問した。1校目はCSAとして平成10年に引き渡した、5番目校である「ナカン村小学校」、2校目は、昨年、基幹労連が寄贈した「ファサン村小学校」であった。「ナカン村小学校」は17年しか経過してない割には、予想以上に損傷が多いと感じた。屋根の破損、トイレの汚れなど傷みの激しい個所が多く見受けられた。本来は、国として、村として寄贈された学校を毎日綺麗に使い、破損個所は自分たちで出来る限りの補修をするのだろうと思うが、財政やラオスの国民性などから多くを望むことは難しいのではないかと感じた。子供達が安全で衛生的に安心して学ぶ環境を維持するためには、過去に作った学校のメンテナンスにも目を向ける必要があると感じた。

一方「ファサン村小学校」は昨年寄贈したこともあり綺麗で立派な小学校であった。しかしながら、子供たちが多く、現在の建屋だけでは入りきれず、自分たちで増設したとのことだった。子供たちのためにも、建屋の増設をすることができたら・・・・と感じました。

同様に学生たちに学ぶ場を提供している高校生寮も視察したが、トイレ・給食室・部屋の中など補修が必要であるところが多く見受けられた。安全で衛生的な生活が送れるよう一刻も早く補

修してほしいと思う。
　その他にもラオス・タイ各国の日本大使館をはじめ関係省庁などを表敬訪問させていただいたが、各地で歓迎され、各部門の上層部の方に対応いただいた。これはCSAの活動を評価していただき、各国での期待の表れであったと感じた。
　行く前は、ラオスってどこにある国？？など知らないことだらけであったが、ツアーに参加し、ラオス人の笑顔に出会い、温かさに触れ、親日国であることを確認し、ラオスって良い国だ！近いうちに日本からの直行便も出る様なので、また行きたい！もっとラオスを知りたい！と感じるツアーとなった。
　いつの日か、CSAが建設した小学校を卒業し、高校生寮を卒業したCSAファミリーと日本で一緒に仕事ができる日を楽しみにしている。

　最後に、ツアーにおいて、サポートいただいたＣＳＡの渡邉副会長をはじめラオスで対応いただいたフンペンさん、タイで対応いただいたチャイさん、そして多くの思い出を共有した参加メンバーの皆さま大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。全ての方々にまた会える日を期待しています。
　ありがとうございました。　ຂໍຂອບໃຈທ່ານ！！

2015ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連　ＩＨＩ労連　柳　瀬　好　文

　今回のワーキング･スタディ･ツアーを終え、まずはＣＳＡ事務局の皆さん、また一緒に参加した皆さんに改めてお礼を申し上げます。またこの機会を与えてくれた基幹労連および構成組織の皆さんへ厚くお礼を申し上げます。
　私はこれまで、ＣＳＡの救援衣類の募集を組織内に呼びかけ、集まった衣類を分別し発送する役割を担当していたため、ある程度ＣＳＡ活動を理解しているつもりでしたが、この取り組みに対する現地の反応は予想を超えており、改めてＣＳＡ活動の意義を理解しました。また、ＣＳＡは救援衣類を送る活動のほかに、学校建設支援を行っていることは、組織内でもあまり認識がなかったため、今後組織内で活動を展開していくに当たり大変貴重な経験をさせて頂いたと思っています。
　さて、今回のワーキング･スタディ･ツアーで一番印象に残っているのは、ラオス日本国大使館で大西参事官から「ラオスは精神的に豊かで幸せな国民である」と伺ったことです。それまで私は、「ラオスは貧しく不自由な生活をしている、だから支援が必要なんだ。」と勝手に思い込んでいたのですが、大西参事官の発言は私の理解を180度転換させました。言わんとするところは、「自給自足で食べ物に困らず、開発を焦らない。争い事を嫌う。何よりも家族と過ごす時間を大切にする国民である。」ということでした。また、「何のための支援か？働くとはなんなのか？を労働組合の立場でしっかりと考えるべきだ。」との問題提起には衝撃を受けました。

いま各国が進めているラオスへの経済支援や、海外企業進出による開発促進、ＣＳＡとして進めてきた様々な教育支援活動が、ラオスの自主自立を促す上で今後も必要なのか、執拗な支援は逆にラオスの発展を阻害してくのではないかと、深く考えさせられました。そんな迷いを払拭してくれたのが、今回の視察を通して出会った子供たちの笑顔でした。同世代の子供がいる身として、誰もが教育を受けられる支援は今後も必要だと再認識したところです。

今回のＣＳＡワーキング･スタディ･ツアーでは、訪問先の方々から心温まるおもてなしを受け、意見交換を通じて相互理解を深めることができました。今後もこの活動が継続され、友好親善の輪が広がるよう、ＩＨＩ労連としても積極的に支援していきたいと思います。

2015ＣＳＡワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連　JFEスチール京浜労働組合　森　泰　隆

まずは、CSA事務局・連合そして今回参加したUAゼンセン・基幹労連加盟組織の方々と現地で受け入れに関わってくださった多くの人に熱く熱く御礼を申し上げたいと思います。８日間本当にありがとうございました。

今回CSAのワーキング・ツアーに参加して「笑顔に国境はない」と強く感じました。

はじめは、ラオス語も英語もしゃべれない自分が現地の方々と上手くコミュニケーションを図ることができるか不安で一杯でしたが、初めに訪問したナカン村の小学校で、私が片言でしゃべった「サバーイディー（こんにちは）」に純粋無垢な笑顔で子供たちが大きな声で答えてくれ、快く受け入れてくれたことにホッとしたのが忘れられません。

ファサン村の子供たちと

また、救援衣料倉庫では、自分の予想をはるかに超える段ボールの数にCSAの活動の「支援の輪」が広がっていることを実感しました。更に、CSAの活動がラオス・タイの現地の人達から感謝され続け、活動が根付いていることに活動内容の素晴らしさと今後の活動の励みになりました。

サンティパープ高校CSA寮では、バーシーと呼ばれる儀式（歓迎と健康を祈るラオスの儀式）を行い、全員で祈った後に我々参加者の両手首に祈りながら紐を結びに来てくれる先生・生徒たちの姿に感動しました。その後も、生徒たちから、率先して踊りを教えてくれたりなど、ラオスの人達の人柄の良さに惹かれる自分がいました。

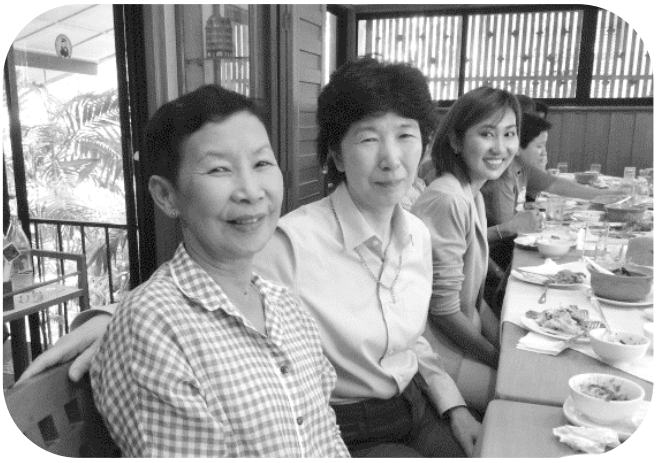
そのほかにも、様々な場所に訪問し、ラオスやタイの人達や文化にふれることができ有意義な時間を過ごすことが出来ました。

７泊８日と長いようで短い期間ではありましたが、濃密な時間を過ごすことができたことに本当に感謝しています。ありがとうございました。

編　集　後　記

今年もお陰さまで無事にCSAワーキング･スタディ･ツアーを終えることができました。
スタディ･ツアーの内容は同報告書に記載のとおりですが、今年は参加者全員の紹介文を作成し、紹介時に活用し支援組織の存在を知らしめる努力をしました。また参加者アンケートには同ツアーの向上を図るためにできるだけ多くのご意見の記載をお願いしました。

ラオスの小学校建設事業については、昨年基幹労連より寄贈されたビエンチャン県内のCSA24番目校、ファサン村小学校、そして同じ郡内に1998年に建設されたCSA5番目校、ナカン村小学校の2校を訪問、比較し、校舎補修の必要性を認識しました。いずれの小学校でも教師や生徒たちに歓迎され、綱引きや折り紙を共に楽しみ、つかのま童心に帰り心の洗濯をしました。
「救援衣類を送る運動」のタイへの中古衣類引渡し式は、ラオスとの国境の町ノンカイで行われ、メコン河にかかる友好橋を渡り出席しました。タイ社会開発福祉省の担当局スタッフはバンコクからバスで10時間かけて来てくれました。
バンコクにおいても衣類倉庫で仕分け作業を見学し意見交換を行いました
ラオスの衣類倉庫では、衣類への要望が多く既に半数が地方に配布済みでした。特筆すべきことはラオス、タイのいずれの倉庫でも「最近の異常気象により、特に北部では朝夕と日中の寒暖の差が大きく冬物衣類や毛布の需要が多いので増やして欲しい」という要望が強く出されたことです。参加者の多くは、倉庫で衣類の量や担当者との意見交換により、あらためて冬物の需要の多さや仕分けの大切さなどに対する意識を持たれたと思います。


わざわざ会いに来て下さったタイ社会開発福祉省のポンペンさん

高校生寮では今年は意見交換、寮内のチェックなどに重点を置き、さらにバーシーといった重要な節目や来訪者の歓迎のために行うラオス文化の伝統セレモニーを経験し、また寮生との交流も楽しみました。保健省から届いていた中古衣類を皆で寄贈し、寮生の喜ぶ笑顔はなによりのお土産でした。

今年は日本ラオス外交関係樹立60周年であり、成田―ビエンチャン間の直行便の導入も予定されており、それぞれの国で様々なイベントが開催される予定です。またビエンチャン市内で見かける日本からの寄贈された中古バスは好評です。
ラオスやタイを知り、CSA活動を共に考え、理解を深めていただくために、多くの組織の方々に同スタディ・ツアーにご参加いただき、活動現場を体験していただく重要性をこの報告書でご理解いただきたいと思います。

日本からのエアコン付中古バス

最後に参加者、参加組織の担当者、現地協力者の方々に心より感謝申し上げます。　コップチャイライライ。ຂອບໃຈ ຫວາຍ ຫວາຍ 。

アジア連帯委員会（CSA）渡邉ひな子

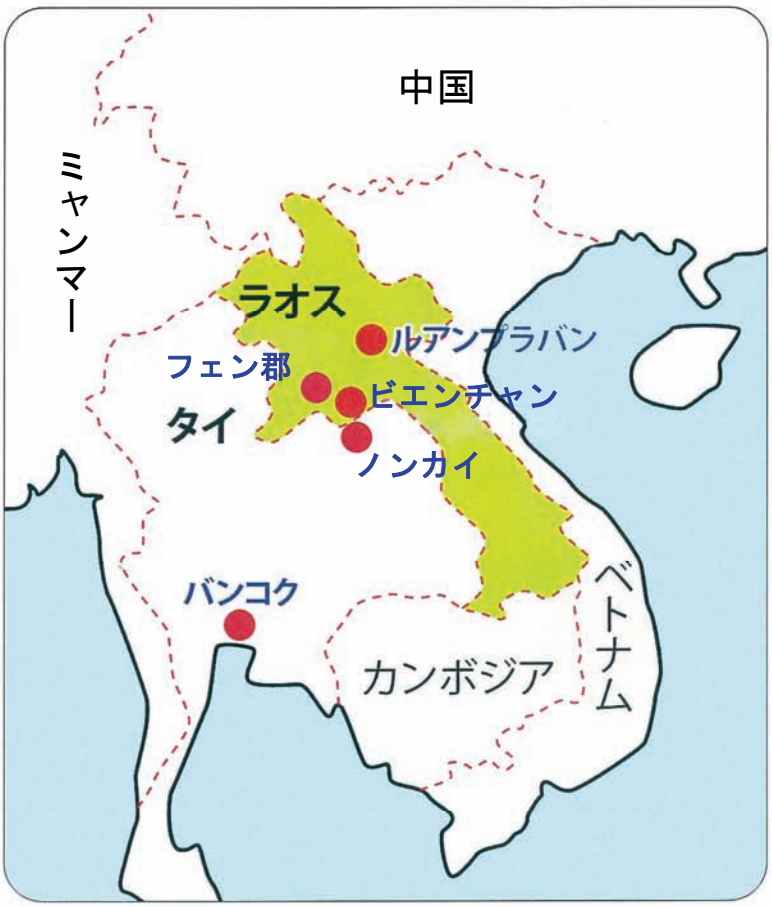
救援衣類を送る運動
ラオスの中古衣類配布風景

2015 CSA ワーキング・スタディ・ツアー バンザーイ

2015 年 CSAワーキング･スタディ･ツアー報告書

発行日　２０１５年３月
発行者　アジア連帯委員会（CSA）
〒105-0014　東京都港区芝 2-20-12 友愛会館 14 階
Tel（03）3769－4177　Fax（03）3769－4178
メール：info@ngo – csa.jp

印　刷　株式会社コンポーズ・ユニ
Tel（03）3456－1541　Fax（03）3798－3303



THE SOLIDARITY WITH THE ASIAN UNDERPRIVILEGED – THE COMMISSION FOR